

---

# 虚実の狭間

仲谷恭司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虚実の狭間

### 【Nコード】

N2865Z

### 【作者名】

仲谷恭司

### 【あらすじ】

そこで僕は生きてい。

たとえば、こんな妄想。

目を閉じ、息をするな。何も考えるな。縮こまり、体を硬直させて石となれ。

音を立ててはならない。気配を消せ。お前はそこに存在しない。ぎゅっと眉間に力がこもる。

僕は早鐘を打つ心臓の音に恐怖を覚えた。

僕の中で爆音が響いている。何か僕の内側のドアを執拗に、乱暴に叩いているような音が。

恐怖が僕の意識に反して、体を小刻みに震わせる。

これじゃまるで僕は発信機だ。見つけてくれと懇願しているようなものじゃないか。

僕は心臓を手で握って震えを止めたい欲求に駆られた。

そうすれば僕は死んでしまうだろう。

嫌だ、死にたくない。でも震えれば死ぬ。だから止めたい。

なんとということだ。どちらにせよ僕は、死ぬのだ。

瞬間、僕の黒く塗りつぶされた視界に死という文字が孵化し始める。

もの一瞬でゴキブリのようにうじゃうじゃと視界にこびりつく、無数の死。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

がくがくと顎が揺れ始める。

……な、んで、だよ……。

憎しみと悔しさで、頭痛がするほどに顔面の筋肉が醜く歪む。喉の奥が詰まり、目から液体が零れる。

嗚咽は唇を噛んで我慢する。今はもう無意識にそうしてしまう。おかげで僕の唇は下唇だけぶよぶよに肥大していた。

……なんで僕が、死ななくちゃいけないんだ。僕は何もしていないじゃないか。どうしてこんなにも現実には理不尽なんだ。

僕をこんな運命に導いたのは誰だ。僕は望んじやない。そうだ。だから全部お前のせいなんだ。お前が望んだから僕はこんな状況に立たされているんだ。

お前が悪い。お前が悪い。お前が悪い。

「おいっ、そこに誰かいるのか！」

鐘が鳴った。

「と、いうわけで今日はここまで。次回はこの続きからということでお疲れ様でした」

そう言っって古文の教師は先ほどまで剣に見立てていた指し棒を短くし、とても満足そうに教室を出て行った。

「おいっ、そこに誰かいるのか！」

クラスのお調子者ポジションの奴が早速ネタにしている。もはや飽きるほどに見慣れた光景だった。

「絶好調だな」

隣の席の友人が妙な笑い顔で僕に話しかけてくる。

「熱くなんのはいいけど、いい加減ちよつとくどいわ」

だいたい数百年前に人が感じていたことなんて分かりっこないのに。勝手に解釈を押し付けられるのも疲れるというものだ。

「まー、俺は結構楽しんでるけどね」

「あそこまでいくと最早妄想の域だろ」

「いいじゃん。なんつーか、ロマンがあつて」

「歴史に夢見るなよ。現実はずつとつままないの。今日のアレだっ

て、あんなドラマみたいなセリフ言ったはずないね。誰かいるかもしれない、ってなったら何も言わずにこっそり近づいて確認するだろ」

「まあ、そうだろうけどさ。お前ちょっと現実的すぎ。だからモテねえんだよ」

「うっさいわ」

映画や小説の中でなら良い。むしろ大歓迎だ。

夕日を背に決意する別れ、空中での魔法大戦、突如始まる戦争。大いに結構。

だが歴史となると話は別だ。そこに居た人物は紛れもなく僕たちと同じ世界に生きていた。

そこにドラマ性などはほとんどなく、現実的な泥臭さが世界のほとんどもを埋め尽くしているのだ。

にもかかわらず創作物のように脚色して事実を捻じ曲げるのは、妄想と現実が混ざり合ってしまうようで、……嫌だ。

妄想は妄想であるからこそ、人はそこに安寧や刺激を見出せるのだと思う。

「もしかしたら織田信長は腹上死したのかもしんないぜ？」

「あり得ない。そんな説ないし」

「その説つてのも結局は口伝えとか本に記されていたものを基にして創られた“一番もつともらしい話”じゃんか。創作物と何が違うんだよ」

「いや、だつてちゃんと証拠が」

「全部ウソだったら？ 俺たちの知ってる過去は全部誰かが作った創作物で、実は今は西暦二千年じゃなくて、五度目の人類誕生から六千三百年だつたり」

「馬鹿言つな。ありえない。僕たちの居るこの世界は過去の人物が生きてきた上にある。文学だつて科学だつて、偉人の名前がごろごろ出てくるじゃないか」

「お前は盲目的に信じるんだな？ 自分の目で見たわけでもないの

に。お前だけじゃない。この世界に生きている人間は、せいぜい百年前までの記憶しか持っていない。その前に様々な事象を感じていた人たちはもう死んでしまっているんだ。なのに何故、それが真実だと言いつける？」

突然真顔になって口調が変わった友人に面食らう。

「じゃあ、何が本当なんだよ」

「そうだ。それが問題だ。書でなくとも、他人であるだけでその人が考えていることを理解することは不可能だ。つまりこの世界に本当のことなどただ一つを除いて存在しない」

そこで突然、饒舌な友人は言葉を切った。

「そのただ一つって、なんだ？」

友人は体をこちらに向け、力強く言い放った。

「自分が自分である、ということだ」

強く風が吹いた。そして永遠とも感じられるような無言の時間が流れてゆく。

その時、僕の頭に天啓とも言わなければならないような無言の時間が

こいつ、は……まさか。

「そうだ。俺は、」

その先の言葉を、このときすでに僕は分かっていた。

それが、僕の運命だったから。

「お前だ」

「そうやって先月貸した一万円ごまかそうとしても無駄だからね」

「やっぱ無理か」

友人が情けない顔で笑った。

だんだんとつられて僕も笑えてきてしまう。

こうやってお互いに変な冗談を言い合うのが、僕らの日課だった。くだらない。本当にくだらない。

どうしようもなく平和で、退屈な日常。

たまには自分が悲劇のヒーローになる妄想をするときもある。僕

はけっこう痛い子だ。

でもそれは妄想で、けして現実ではない。

それがいいのだ。現実はずまらないからこそ、現実らしい。つまらないから、小さな冗談でこんなにも笑いあえる。

そんな現実に住られて、

僕は今、とても幸せだ。

黒い雨がさめざめと降り注ぐ中、円形に抉られた焼け野原の中心で、少年は擦れた声で咆哮し、一発の銃声が大気を震わせた。

(後書き)

もらった古い溶接機のバッテリーを充電しようとしたら、液面低下のランプが点灯。

なぜだー！ 液タブタブに入ってるのに。

六年間雨ざらしだったらしいから、やっぱりどこか故障してるのかな……。

少しでもお楽しみ頂けたなら幸いです。

ご読了、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2865z/>

---

虚実の狭間

2011年12月10日02時50分発行